

# 蘇芳集

中日の

青山

丈

一つから咲き出して紅椿かな  
日の伸びただけ珈琲を飲んでゐる  
平熱でバレンタインの日であつて  
ユニクロの奥の奥処の亀鳴けり  
中日の踏台を踏み本を抜く  
三月の話がしたい人がゐる  
子の声にもう止むでゐる春の雪

人ごゑ

木内憲子

何しても心足らずや梅ひらく  
よく晴れて春分の日の普段ごと  
春分の日を働けば影が蹤く  
春雷のおぼろげながらしつかりと  
春禽や部屋に射す日も朝のうち  
人ごゑを近くにしたる春障子  
たまはりし言葉の数のあたたかく

(悼・渡邊瀧郎様)

春雪

小島みつ如

梅の里屋敷のしだれ梅競ひ  
梅薫るフォトウエディングの正装も  
配膳の腰の鈴鳴る菜花和へ  
花菰の樹々の隙埋め藍淡し  
楽鳴らし販売車くる庭日永  
露の花咲かせ親しむ余生かな  
春雪かき姪逝きしとふ写経せむ

花衣

清水裕子

元祿の墓石のぬくみ亀鳴けり  
青空に残りたる畑打たれけり  
耕して土蘇る日中かな  
春雪の畑の残り菜雀きて  
五分咲きの桜に五分の花明かり  
たつぷりと降る雨さくらながすなよ  
花衣かろく叩きて句座につく

紙雛

下平直子

遠くまで畦とほくまで犬ふぐり  
水郷の水の青しよ犬ふぐり  
宝箱開ければ父の紙雛  
アルバムを繰りて雛の夜を更かす  
どこまでも雨後の青空花辛夷  
湧水に朝日の躍る野に遊ぶ  
橋わたるとき水の香の春シヨール

その上に椿

富田正吉

奔放に揺れて呉れたる椿かな  
椿派はくれなゐも好き白も好き  
その上に椿その上にも椿  
フアクシミリ椿を黒く出して来る  
手を組んで足組んで見る椿かな  
鏡中に集まつてゐる椿かな  
あをぞらに描かれてをりし椿山

もう一つ

野路斉子

功労賞をいただく  
花籠二つ母の日のものもう一つ  
野は五月云ふこと聞かぬ脚抱いて  
母の日のおのれ励ます杖赤く  
年上の人たち元氣ポピー咲く  
病葉や犬通らねば猫もまた  
人暮らす泰山木の花の上  
夏炉焚く文鳥たちの団欒に

鳥の巢 別府 優

具をたんと巻いて天皇誕生日  
ゐるだけで春の金魚になつてをり  
足跡の散らばつてゐる春並木  
金縷梅や生きる限りを呼び子の名  
足許に鳩のまつはる彼岸かな  
バスの窓に顔おし当てて卒業す  
産土の鳥の巢だけを見て帰る

殊のほか 前田 陶代子

こぶし咲く水音束なす寺領の井  
殊のほか落ちゐて大き紅椿  
築山の夕かげあはき雛の膳  
視野の端に雲のひとひら春愁ひ  
ゆるゆると刻の溜まれる花山茱萸  
雨の来る気配に崩れ紫木蓮  
さくら湯のさくらの匂ふ雨の午後

おぼろ夜 峰岸 よし子

おぼろ夜の貝が砂吐く水の中  
二日月あげて櫻の芽吹きそむ  
春動く潮入り川の荒しぶき  
舟ばたを叩く満ち潮春兆す  
啓蟄やうす紙に靴つつまれて  
遠嶺晴れぶつきらぼうに惚芽吹く  
三猿に見よ聞け言へと春の風

梅ひらく 宮尾 直美

白梅の翳濃くありぬ兜太の忌  
柎を挿す裏口は風溜り  
天気図の西より動く木の芽風  
美しきものみな消えやすし春の雪  
梅ひらくほどの幸運有りやあり  
梅の香や逢ひたき人はみな遠し  
父の句を諳じをれば亀の鳴く